

日本記者クラブ会報

公益社団法人 日本記者クラブ 〒100-0011 東京都千代田区内幸町2-2-1 日本プレスセンタービル TEL.03-3503-2722 <https://www.jnpc.or.jp/>



米議会演説 米議会の上下両院合同会議で演説し、議員たちから拍手を受ける岸田文雄首相
(中央)=4月11日、米ワシントン 撮影:帖地 洗平(読売新聞東京本社写真部)

2024年度の日本記者クラブ賞は後藤謙次さん(共同通信社客員論説委員、白鷗大学名誉教授)に、同特別賞は北海道放送ヤジ排除取材班(代表・山崎裕侍さん)と、テレビ静岡「イーちゃんの白い杖」取材班(代表・橋本真理子さん)に贈られることが4月24日の理事会で決まった。

後藤謙次さんは40年以上にわたって政治、とりわけ永田町のパワーゲームを深く取材、その集大成となった著書『ドキュメント平成政治史』シリーズに加え、テレビ等での鋭くかつわかりやすい解説が政治ジャーナリズムの信頼、活性化と成熟に大きなインパクトを与えた。北海道放送は参議院議員選挙期間中、応援演説をしていた安倍晋三首相(当時)にヤジを飛ばした市民が警察に排除された問題を、4年間にわたり粘り強く検証し、日本の言論の自由、民主主義の現状を問うた意義が大きいと評価された。テレビ静岡は、生まれつき目の見えない少女「イーちゃん」が、重度の障がいをもつ弟と家族に支えられながら自立する姿を25年にわたり取材し続け、テレビと映画を通して障がい者とともに生きることと、命と家族という、普遍的な問いを投げかけた。

贈賞式は5月31日午後5時45分から東京都千代田区内幸町の日本プレスセンタービルである。クラブ賞の後藤さんは7月10日、特別賞の2組は7月17日に受賞記念講演を行う。

(専務理事 江木慎吾)

後藤謙次さんに記者クラブ賞
特別賞は二つのテレビ取材班
ヤジ排除・イーちゃんの白い杖

クラブ賞と特別賞の2件

息の長いこだわりの取材

贈賞の理由

政治報道の信頼性高める

後藤謙次さん

今年度の日本記者クラブ賞には6件、同特別賞にも6件の応募があった。選考委員会は4月10日にあり、推薦委員会での議論を参考に意見交換し、投票の結果、日本記者クラブ賞1件、同特別賞2件を賞にふさわしい候補として答申した。長期にわたる幅広い活動、粘り強く対象を追い続ける姿勢が評価されたのが、今回の特徴となった。

政治家の息遣いにこだわり、40年以上にわたり永田町のパワーゲームを深く取材してきた。その活動の集大成となった『ドキュメント平成政治史』は、現代政治史の貴重な記録といえる。テレビやラジオでの明快

で鋭い解説は、政治と市民を近づける役割を果たしてきた。政治ジャーナリズムの信頼、活性化と成熟に与えたインパクトは大きい。

表現の自由深く問いかけ

北海道放送ヤジ排除取材班

参議院議員選挙期間中に応援演説をしていた安倍晋三首相(当時)にヤジを飛ばした市民が警察に排除された問題を、4年にわたり粘り強く検証し世に問い続けた。劇場拡大版として制作した映画は、足下の表現の自由がどのような状況にあるのか、民主主義の土台がどうなっているか

壁を払い障がい者とともに

「イーちゃんの白い杖」取材班

生まれつき目の見えない女性と重度の障がいを持つ弟、そしてその家族を25年間追いつけたカメラは、「イーちゃん」の自立を通して命と家族という普遍的な問題を映し出した。障がい者を特別な人と感じさせずに、一緒に生きることを考えさせる。エンターテインメントとして高い評価を得たことも、ドキュメンタリーの可能性を感じさせた。

クラブ賞 後藤謙次さん 共同通信社客員論説委員

一本刀 政治家と向き合う



テレビで親しんだ柔らかな表情の奥に、永田町の海千山千の政治家と渡り合ってきた、人を射抜く鋭い目がある。小学生のころから実家の食料品店の配達を手伝い、大人の真贋を見分けてきた目だ。「政治記者は9割以上

が運」という。田中角栄元首相率いる田中派を1984年に受け持った時に、竹下登と出会ったことが、運を引き寄せる手綱になった。角栄との権力闘争のさなかにいた竹下は、なかなかまともに会話もしてくれなかった。それでも信頼を勝ち得て、担当が替わってもその縁を離さなかった。「一本の井戸を深く掘れ。深く掘ればやがて水は地下水脈でつながっているから横に広がるぞ」と、権力の頂点に上り詰めた竹下には言われた。その竹下邸で、自民党の実力者の多くを知ることになる。最後には「どうせまた朝来るんだから泊

まっついていきなさい」と夫人に言われるまで通い詰めた。政治記者として「川向うから大砲を撃つのはやめよう。必ず川を渡って、一本刀でもいいから面と向き合って原稿にしよう」と、政治家の言葉、息遣いにこだわり続けた。そのこだわりが結実した『ドキュメント平成政治史』も、竹下の言葉がきっかけになった。「老兵は消え去るのみか、平成の語り部となるか」。間もなく病に倒れた竹下の言葉を引き継ぐように平成政治の語り部となってゆく。目まぐるしく動く政治を追い、94年から95年にかけて心筋梗塞で入院

した期間以外、一日も欠かさず取材を続けた。共同通信社では政治部長をへて編集局長になったが、その任にあっても永田町に足が向いた。自ら勘どころをつかんでいないと、日本の首相が重要な決断をした時の部下の裏取りに「わかった、よくやった」と言えない自分がいた。共同通信社の報道のど真ん中からTBS「NEWS23」のキャスターに転じたのが2007年。多くの部下を裏切った思いが消えなかったが、17年をへて共同通信社が自分を賞に推薦してくれた。そのことを、賞そのものよりも大きな榮譽に感じる。

特別賞 テレビ静岡
「イーちゃんの白い杖」取材班
はじける笑顔 追った25年



イーちゃん（小長谷唯織さん）のはじける笑顔に出会ったのは1998

年のことだった。橋本真理子さん（53）はテレビ静岡報道制作局長兼情報ニュース部長。IIは、障がい者の番組をつくりたいと思ってきた。どうしたらこんな子が育つんだらう。家族を訪ねたら、目の見えないイーちゃんの弟の息吹さんは重い障がいを抱えていた。家族はテレビカメラを喜ぶように受け入れてくれた。番組をつくっても通い続けた。そうさせるものがあった。「私たちがかわいそうですかね」。そうイーちゃんの母に尋ねられた。大変ではある。でも、ここには幸せがある。

それを伝えたいと思った。記者として入り込みすぎる怖さは知っていた。でも、とことんまで入り込んで、本音で語りあい、批判しあう関係にならなければ伝えられないと思った。報道を担当しながら、一つの家族をずっと追いつけるのは簡単ではない。仕事をこなし、休みの日に出かけた。気づくと、通っている自分が元気をもらい、支えられていた。そんな中、イーちゃんから笑顔が消えた。いじめに会い、色んな壁にぶつかった中学のころ。息吹さんの病気が大変な時でもあった。あのは

じける笑顔が戻るのを見届けるまではやめられないと、カメラの杉本真弓さんと話した。神奈川県相模原市の障がい者施設で2016年、19人が殺された事件に、自分が伝えてきたことは何だったんだろうと思った。それでも、この家族に自分が支えられたのだから、それをそのまま伝えれば、健常者が障がい者に支えられるんだということは伝えられると思った。追いかけて25年。イーちゃんは結婚し、はじける笑顔が戻った。この笑顔は一つの区切りになると思った。

特別賞 北海道放送ヤジ排除取材班
少数者を排除しない社会に



元北海道警幹部の原田宏二さん（故人）が報道機関に突き付けた言葉は重い。「今回の場合に恐ろしいなあと思うのは、これをね、たかさんのマスコミのいる前で堂々と

やったということですよ。あなたたち無視されたんですよ」。2019年、札幌で選挙応援の演説をした安倍晋三首相（当時）にヤジを飛ばした市民が警察によって排除された現場に、北海道放送のテレビカメラはいなかった。そして、当時ニュースの責任者の立場だった山崎裕侍さん（52）は、コンテンツ制作センター報道部デスクIIが排除について知ったのは、2日後に他のメディアが報じてからだった。出遅れた。その後、4年にわたりこの問題をしつこく追いつ

つた山崎裕侍さん（52）は、コンテンツ制作センター報道部デスクIIが排除について知ったのは、2日後に他のメディアが報じてからだった。出遅れた。その後、4年にわたりこの問題をしつこく追いつ

た。04年のイラク日本人人質事件に「自己責任論」が沸き起こったころから、自分たちと少し違った少数者が排除される社会に怖さを抱いてきた。ヤジ排除はそういう問題であり、表現の自由の侵害だと感じた。出遅れを挽回するため、排除された人たちが起こした国家賠償訴訟を長沢祐記者と追い、排除の実態の検証を続けた。こたわって報じ続ける報道機関は少数だった。自分達が報じないと、という危機感があった。原告の表現の自由は警察官らによって侵害された、との札幌地裁判決

が22年に出た後も、判決がどういう影響を及ぼすのか見続けた。その夏の参議院選挙期間中に起きた安倍元首相銃撃事件に絡み、札幌地裁での判決が警察の警備に影響したという論調がメディアからも広がった。そんな心配な状況はあったが、同じ参院選で岸田文雄首相が札幌に応援演説に来たとき、ヤジが飛んでも排除の動きはなかった。性的少数者のカップルがプラカードを掲げていた。ヤジ排除の番組を見て、声を上げようと思ったのだという。現実が動く瞬間に、報道を通じてかわれたと感じた。

今月のゲストの皆さん

ゲスト全員の会見レポートは右のQRコードを開きウェブサイトで見られます。出席欄の「会」は会場、「オ」はオンラインの参加人数です。



*下記のゲストの会見レポートは5～8ページに掲載しています

富山 和彦さん 経営共創基盤 (IGPI) グループ会長

■ 3・27/出席：会11人、オ39人/「働く人材クライシス」⑧
/司会：菅野幹雄委員

「かかりつけ医を考える」英仏独の訪問調査から

森井 大一さん 日本医師会総合政策研究機構主席研究員

■ 3・28/出席：会7人、オ25人/司会：猪熊律子委員

神野 正博さん 社会医療法人財団董仙会恵寿総合病院理事長

■ 3・29/出席：会7人、オ31人/「働く人材クライシス」⑨
/司会：猪熊律子委員

Glenn L. Carleさん

元CIAオペレーションオフィサー

■ 4・3/出席：会36人、オ52人/「2024 米大統領選」③
/司会：杉田弘毅委員/通訳：池田薫さん

松田 康博さん 東京大学教授

■ 4・11/出席：会37人、オ61人/「中国で何が起きているのか」⑫/司会：高橋哲史委員

前嶋 和弘さん 上智大学教授

■ 4・12/出席：会36人、オ74人/「2024 米大統領選」④
/司会：杉田弘毅委員

杉山 晋輔さん 元駐米大使

■ 4・17/出席：会43人、オ67人/「2024 米大統領選」⑤
/司会：大内佐紀委員

淵上 玲子さん 日本弁護士連合会会長

■ 4・22/出席：会26人、オ44人/司会：井田香奈子委員

林 宏文さん 経済ジャーナリスト



30年にわたり半導体取材している。「(TSMCの)熊本工場がなぜ重要か。日本の製造分野が復活する手助けになる。日本の半導体産業の材料、自動車業界など半導体を使う産業に大きなメリットがある」「日本と台湾は相互補完性があり、互恵の関係になり得る」

■ 4・25/出席：会36人、オ57人/著者と語る『TSMC 世界を動かすヒミツ』/司会：高橋哲史委員/通訳：大森喜久恵さん

齊藤 貢さん 元駐イラン大使 東洋英和女学院大学非常勤講師



「イラン大使館の攻撃はネタニヤフ首相の誤算だ。ヒズボラに報復させ、レバノンに侵攻することを企てたが、イランが一枚上手だった」「『影の戦争』が公然化し、大規模衝突が起きやすくなった」「政権延命に必死なネタニヤフ首相はラファ侵攻作戦を進めるだろう」

■ 4・26/出席：会27人、オ47人/「ハマス・イスラエル衝突」⑥/司会：出川展恒委員

▼ 写真回廊	20	▼ 2024年度日本記者クラブ賞・同特別賞受賞インタビュー	23
▼ 会議報告	18	▼ 今月のクラブゲスト	4
▼ 試写会「正義の行方」	17	▼ 会見レポート	5
▼ MAYBOOKマイPR	16	富山和彦 経営共創基盤(IGPI)グループ会長/森井大一 日本医師会総合政策研究機構主席研究員/神野正博 社会医療法人財団董仙会恵寿総合病院理事長/グレン・カーレ ニューズウィーク日本版コラムニスト、元CIAオペレーションオフィサー/東京大学教授/前嶋和弘 上智大学教授/杉山晋輔 元駐米大使/淵上玲子 日本弁護士連合会会長	58
▼ 書いた話書がなかった話	14	▼ ワーキングプレス	9
▼ 訪朝66回の母の思い出	15	大谷選手の元通訳の違法賭博問題	11
▼ 「寺越事件」の真相求めて	中西茂	小林製薬「紅麹サプリ」健康被害	
▼ ジュネーラさん	13	尊富士、110年ぶり新入幕優勝	
▼ リレーエッセー		スपोर्टスニッポン新聞社	前川晋作
▼ ハイチ難民の少女		読売テレビ放送	中野颯大
▼ TBSテレビ	市川正峻	読売テレビ放送	中野颯大
▼ 静岡放送	坪内明美	読売テレビ放送	中野颯大
▼ 静岡県	12	読売テレビ放送	中野颯大
▼ 静岡県	12	読売テレビ放送	中野颯大
▼ 静岡県	12	読売テレビ放送	中野颯大



富山氏は地域専門誌「日

M&Aを進めてブラックな会社から、給料が高く生産性の高い会社へ集団で移るとよい」と説

自治体の首長のもとには連日のように業界団体が面会に訪れる。支局勤務時、実情を知ろうとできるだけ同席取材したが、多くは「一層の支援」を求める経営者。自社の業績が好調な社長も「同業者を見捨てるとは言えない」と業界の秩序維持を求め、公費による経営支援が後押しする。

企業再生で知られる富山和彦氏は、地方のバス会社などローカル企業もよみがえらせている。「男女別のトイレや更衣室を整備。投資をして給与も出生率も高くなっている」と言い、「人手不足という大転換期。

「働く人材クライシス」⑧
富山 和彦
経営共創基盤(GPI)グループ会長
3月27日

経グローカル」の巻頭提言で、地域に根差したローカルなL型企業の重要性を繰り返し指摘してきた。その経営が厳しい場合、M&Aによる新陳代謝が従業員も地域も幸せにすることは誰もが理解できるはずだ。しかし、「閉塞感はあるも安定重視でいくという選択をした」ことが今につながっている。

背景のひとつが、会場で何度も出た「刷り込み」だろう。少子化・高齢化で次元の違う人手不足の時代がきたのに、ライドシェアの解禁議論では「運転手が供給過剰になりワーキングプアになる」という議論が出る

と言いつつ、「昭和とデフレの刷り込みを断ち切る必要がある」と強調した。質疑応答ではホワイトカラーの意識改革にも話が及び、「リスキリング後はノンデスクワークの仕事も多い。バスの運転手は大歓迎。社内調整ばかりやるよりおもしろいでしょう」などと語った。労働政策を主題に労組や新卒採用、国土の縮減など話が多岐に及んだが、「既存の仕組みを変えないとデフレよりつらいスタグフレーションになる。今はその天国と地獄の境目」という言葉が耳に残った。

日本経済新聞社「日経グローカル」編集長

浅山 章



「コロナ禍で欧州ではかかりつけ医は機能したのか」。日本医師会が2023年5〜6月に英国、フランス、ドイツの3カ国に調査団を派遣し、実務を担った日本医師会総合政策研究機構の森井大一(大)主席研究員の結論は明快である。「登録制がある英国、フランスでは期待された役割を果たせず、登録制のないドイツは機能した」ということになる。

「かかりつけ医を考える」
英仏独の訪問調査から
森井 大
日本医師会総合政策研究機構主席研究員
3月28日

場合は15番(救急)に電話して」と指示した。その結果、両国ではコロナ患者が集中した病院に局限した医療逼迫が起き、機能不全に陥った。

ドイツでは登録制はないものの、患者と信頼関係を築き、外来機能を果たす開業医がコロナ患者の「20分の19(95%)以上を受け止め、病院機能を守る防壁となった。需要計画に基づき診療科レベルで外来機能の均てん化が図られており、コロナでは診療科を問わず軽症患者を診療したという。

フランスでは政府指示は1カ月余りで撤回され、かかりつけ医以外にも全額保険でカバーするようになり、日本型のフリーアクセスで乗り切ったと報告する。

「日本にかかりつけ医制度があればコロナ禍で医療アクセスはもっと良かった」という見解に対する反証を示した。この日は3カ国の報告が中心だったが、日医総研の「欧州医療調査報告書 概要版(23年11月)」では、診療拒否した医療機関や応召義務を緩和した政府対応など日本の課題にも踏み込んでいる。医療体制は国の歴史と文化を内包する。日本の対応も検証し、かかりつけ医機能のあり方を探りたい。

日本経済新聞社医療面編集長 前村 聡



「働く人材クライシス」⑨
神野 正博
 社会医療法人財団暁仙会恵寿総合病院理事長
 3月29日

地域医療が生き抜くモデル

石川県能登地方に甚大な被害をもたらした1月1日の能登半島地震で水道や電気の供給が途絶える中、七尾市の恵寿総合病院は2日から出産や緊急手術に対応し、4日には外来も完全に再開した。「想定外」を想定し、強い病院づくりへの投資を惜しまなかったことが非常時に生きた。神野正博理事長は「目に見えない投資は大きくなるが、基本は二重化だ」と対策徹底の必要性を説いた。

2011年の東日本大震災時に奮闘した宮城県の公立志津川病院（現・南三陸病院）の医師らから得た知見を新たな病棟づくりに生かした。海沿いに建つ病院の液状化を防ぐため地盤を改良し、建物の揺れを逃す免震構造を導入。夜間に離発着ができるヘリポートも整備

した。上水は水道と井戸水の二つを確保し、断水中は井戸水を使って医療を続けた。

設備面に加え、カルテ情報のICT化などソフト面の対策も役立った。透析患者のスマートフォンには自身の透析記録があり、転院先で情報共有できた。医師と看護師は昨年4月からiPhone（アイフォン）で治療記録を共有し、情報交換やナースコールなどの作業も一元化。こうした効率化が、膨大な業務が押し寄せる災害医療の現場を助けた。

ICT化を推進した背景には医師の地域偏在や長時間労働の問題がある。東京など大都市の同規模病院に比べると医師、看護師の人数は少ない。十分な医療を提供するためにICTを活用し、医師、看護師が本来業務に専念できる仕組みを整えた。4月から勤務医にも労働時間の上限規制が適用され、医療現場も「2024年問題」に直面している。従来の働き方を変えずに労働時間を短くすれば、医療の質や経営に悪影響を及ぼしうる。業務の棚卸しや効率化は不可欠で、神野理事長は「働き方改革は仕組み改革」と強調した。そのかじ取りは地域医療が生き抜くモデルとなるだろう。

東京新聞社会部 押川 恵理子



「2024米大統領領選」③
グレン・カール
 ニューズウィーク日本版コラムニスト
 元CIAオペレーションオフィサー
 4月3日

トランプ氏浮上に「露の影」

起訴されながら、再浮上したのはなぜなのか。

カールさんは米社会の内的要因から、その理由を解き明かす。①白人優位の人種差別主義②対外関与を忌避する孤立主義③反エリートの権威主義的ポピュリズムだ。

いずれも歴史、文化に深く根差した米国の底流と言える。そこに訴え掛けるから、草の根の人々と響き合う。「最高の工作（大衆操作）は真実から導かれる」と看破した。人物像を理解する上で、外的要因も見逃せない。旧ソ連・ロシアの対米情報工作である。カールさんによ

ると、トランプ氏は1970年代末ごろに工作対象者となった。ロシアは2011年ごろから、後にプーチン大統領の補佐官となる「灰色の枢機卿」ウラジスラフ・スルコフ氏の主導で、大々的な国内・対外世論工作に乗り出す。

米国が自らの失脚を企てていると思いついたプーチン氏の疑心があったという。米孤立主義を助長し、米欧同盟を引き裂き、米国の分断をおろことが主な目的だった。

トランプ氏の言動と軌を一にする。一連の工作が効いているとカールさんは分析する。「トランプ氏はロシアの資産」とささやかれて久しいが、そんな見方とも一致する。

ただ「資産かどうかは重要ではない」という。「彼は少なくとも部分的には対米工作の産物で、ロシア側の目的を体現している。それが現実なのだから」

もし政権に返り咲けば、孤立主義への傾斜は避けられない。強国化路線を進む「習近平の中国」と向き合うアジアにも大きな試練と戒める。豊富なエピソードを交え、縦横に語った。質疑を含め2時間弱。世界と米国、日本の行方を考えさせられる貴重な会見だった。

共同通信社編集委員 川北 省吾

「中国で何が起きているのか」②

松田 康博 東京大学教授

4月11日

失敗認められぬ「宿痾」



「中国共産党の発想は我々と違う」。だから、彼らが言っていることをそのまま真に受ける。と間違える。自分も含めて中国報道に携

わる者にとっては耳が痛い指摘だ。大学で中国語を専攻して以来、4年にわたり中台関係をウォッチしてきた松田氏。今回、中国の対台湾政策をめぐっても、長年の研究に裏打ちされた分析が冴えた。

まだ中国に十分な経済力も軍事力も備わっていない時代、鄧小平は「能ある鷹は爪を隠す」という意味の「韜光養晦」を掲げ、台湾を平和的に統一するための穏健策を次々と繰り出したが、目的は果たせなかった。意をくんだ江沢民は台湾側と統一に向けた交渉を進めようとしたが、李登輝に振り回された。

意外とやり手だったのが胡锦涛

だ。アメリカに対し、独立志向を強める陳水扁こそが現状変更をまくろむトラブルメーカーだと印象付けることに成功。中台間の緊張を高めた「反国家分裂法」を制定したが、内実は「非平和的方式」という軍事的手段をとるための条件を厳しくしたもので、むしろ現状維持を可能にした。そのうえで経済成長を続ける中国に台湾を依存させ、逃げられなくするという仕掛けを用いた。一方で国際社会の対中警戒感を喚起しないよう、軍備の増強は目立たない形で続けるという狡猾さも併せ持っていた。

ところが続いて登場した習近平は、これらの政策をあっさり「ちやぶ台返し」してしまふ。「江沢民や胡锦涛よりも私の方がうまくできる」と言ったかどうかはわからない。ただ、その後の台湾への威嚇や香港の弾圧、米中対立、戦狼外交が何をもたらしたのかは明白だ。

中国共産党は絶望的にみずからの失敗を認めることができない組織だという。松田氏はこれを「中国共産党の宿痾」と喝破する。

その宿痾は、頼清徳政権発足後の中台関係や国際情勢にどのような影響を与えるのだろうか。(一部敬称略)

NHK解説委員 宮内 篤志

「2024米大統領選」④

前嶋 和弘 上智大学教授

4月12日

生成AI 混乱の選挙に

2024年米大統領選の展望を探るシリーズ企画第4回目。共和党のトランプ氏の再選はほぼ確実とする「ほぼトラ」の見方が強まる中、現代アメリカ政治学の第一人者である前嶋和弘さんは「結果をいま言うのは時期尚早。この段階での断言はウソ」と喝破した。

共和党がトランプ党と化し、保守系シンクタンクも米国第一主義の政策を掲げるなど、2016年選挙とは異なるトランプ氏の強みを列挙した。一方、民主党のバイデン大統領は81歳という高齢が不安視されながら、現状では民主党支持者の約85%から支持を集めており「むしろ圧倒的な人気を誇る」。米連邦



議会も上院と下院の議席数が拮抗しており、「分極化と僅差」がもたらす対立が常態化する現状を指摘しな

がら、本選挙に向けどちらが勝つかは「五分五分」と予断を許さなかった。

勝敗を見分けるポイントに挙げたのは激戦州の動向だ。アリゾナ、ネバダ、ペンシルベニアなどの勝敗が情勢を左右するのは今も昔も変わらない。だが今回の選挙戦では、各陣営がビッグデータを駆使して有権者の動向を細かく探り、選挙広告に生成AIを利用する手法が変わっているという。「生成AI規制が全然進んでいないのが気がかり」とも。テレビCMやSNS上の偽動画が、新たな誹謗中傷の火種となることが目に浮かぶ。選挙戦がかつてない混乱に陥る可能性に留意が必要となる。

日本への影響はどうか。バイデン氏再選ならば大きな変化はないが、トランプ氏が再び咲けば「同盟国との関係は急変する」。防衛費の増額を求められたり米企業の買収が難しくなるなどの可能性に触れた。

どちらが勝つにせよ、米国民が日本に寄せる信頼は厚く、中国という「共通の敵」が日米の結束を強めるとみる。日本としては「変化があるにしろないにしろ知恵を使い能動的に対応すること」が肝要と説いた。

東京新聞経済部(中日新聞社元ワシントン特派員) 石川 智規



「あの人柄とスタイルに、どれだけ胸襟を開き、飛び込んでいけるか」というのが第一の関門で、トランプ氏が最初

「2024 米大統領選」⑤
杉山 晋輔 元駐米大使
「もしトランプ」にどう備えるか
4月17日

ドナルド・トランプ氏が11月の米大統領選で返り咲く、「もしトランプ」にどう備えるか。いま日本外交の最重要課題の一つだろう。

杉山氏は2018年から3年間、駐米大使としてトランプ政権高官と密に付き合った。トランプ氏本人には「人の気をそらさない、ある種のカリスマを感じた」としつづつ、「何をやるかわからない怖さも間違いなくある」と指摘する。

ホワイトハウスの主が誰であろうと良好な関係を築かなければならないのが、米国を唯一の同盟国とする日本にとっての必然だ。当然、「もしトランプ」に対し、万全の態勢をとら

に当選した時よりも、そのハードルは高くなっているとみる。

4月の岸田首相訪米時、日米同盟は米国と肩を並べて共にある「グローバル・パートナー」にバージョンアップされた。杉山氏は同盟のポイントを「守るべき国民や国土、自由や民主主義といったイデオロギーのため、共に戦うこと」と定義。その上で、「同盟の本質に相反しない範囲で、異なる政策を取ることとも同盟をより豊かにする要素だ」と強調した。

その試金石は対中政策になるだろう。冷戦時代のソ連封じ込めと状況は異なり、中国は封じ込め（containment）や譲歩（appeasement）ではなく、関与（engagement）の対象だという。

対中強硬策を有権者へのセールスポイントとし、自らを「取引（dealer）の達人」とみなすトランプ氏に、どうこのことを説得するのか。杉山氏は、挑戦（challenge）と脅威（threat）の違いを認識してもらうことが鍵になると語った。

シリーズ担当企画委員 読売新聞社調査研究本部 大内 佐紀

測上 玲子 日本弁護士連合会会長
男女差別解消が役割
4月22日



日本弁護士連合会の会長に就任した測上玲子さん。法曹三者それぞれ、初めての女性トップだ。日本初の女性弁護士、

三淵嘉子さんをモデルにしたNHK朝ドラが話題になる中、注目を集めている。

女性法律家の誕生から84年、男女平等をうたう現憲法下で日弁連が設立されてからも75年がたつ。その現実が、日本で男性優位の社会が続いてきたことを示している。

測上さんも会見で自身の経験を語った。所属先の弁護士事務所を探している際、「女性は採用しないよ」と言われ、反発を覚えたこと。弁護士になってしばらくたち、同期の男性は顧問先の会社を複数抱えているのに、自分はなかったこと。

今年、弁護士に占める女性の割合が20%を超えた。着実に人数は増え

ているが、裁判官や検察官に比べると、比率で後れを取っている。

測上さんは、フリーランスの立場が多い弁護士特有の課題を挙げた。産休・育児時の事務所との関係、業務の中断によるキャリア上の不利益、男性弁護士との収入格差。「これらを解決していかないとならない」と語った。「司法は、健全な社会の維持発展のために極めて重要なインフラだ」と述べ、ジェンダーバイアスの解消に向け、女性弁護士の割合拡大が不可欠だと強調した。

初の女性会長として取り組むテーマに掲げたのが、選択的夫婦別姓制度の実現だ。夫婦の95%は女性が改姓している実態を改め、「改姓しない自由」が保障されるようにしたいという。日弁連はこれまでも意見書を出したり、国会議員に要請したりしてきたが、単発的だったと分析した。「しつこく、しつこく言い続けていかないと実現しない」と力を込めた。

社会全体の男女差別をなくすことが、自分に課せられた役割と話す測上さん。長年にわたる課題の解決に向け、行動力と手腕に期待したい。

毎日新聞社論説委員 北村 和巳



大谷翔平選手(右)と、専属通訳だった水原一平容疑者(3月18日/ソウル/朝日新聞社提供)

大谷選手の元通訳の違法賭博問題 中井 大助 (朝日新聞社ニューヨーク支局長)

当事者へ直接取材、困難

米報道引用のみに葛藤

大リーグを代表するスター、大谷翔平選手の通訳だった水原一平容疑者が違法賭博に関わり、負けを支払うために大谷選手の口座から無断で送金していたとされる問題は、米連邦検察が4月11日(米国時間、以下同)に水原容疑者を銀行詐欺容疑で訴追し、一つの節目を迎えた。問題発覚後、日米メディアで大きな報道が続いたが、当事者取材は困難で、

「ESPNによると」としか

伝え方に悩む局面も多かった。

水原容疑者をめぐると一報が入ってきたのは、3月20日。「大谷選手の通訳が解雇され、巨額の盗みが疑われる」と、ロサンゼルス・タイムズとスポーツ専門局ESPNが報じた。

この数年、米国で最も話題となった日本人は間違いなく大谷選手だろう。投打の「二刀流」でファンを魅了し、米メディアも注目。2023年12月、米プロスポーツ史上過去最高額となる総額7億ドルの契約をドジャースと交わした際の会見には、何十台ものテレビカメラが並んだ。

ただ、大谷選手は公的な場で英語をほとんど話さず、通訳の水原容疑者が常に隣にいた。振る舞いも目立ち、通訳として異例の知名度だった。

それもあってニュースへの驚きは大きく、すぐに日米で話題となった。しかし、確認できる情報は少なかつた。ドジャースの開幕戦はソウルだったため、大谷選手や水原容疑者ら関係者は韓国におり、アクセスが

困難だった。球団は水原容疑者の解雇を認めたものの、「情報を収集している」と述べるにとどまった。

「ESPNによると」としか

事態はさらに、急転した。水原容疑者に事前取材していたESPNが「3月19日には『賭博の借金返済を大谷選手が肩代わりすると同意していた』としていたが、20日になって、『大谷選手は賭博や借金のことを何も知らなかった』と説明を翻した」と報じたのだ。

二つの説明は相矛盾するが、どちらが正しいかの確証はない。しかも、どちらが本当かによって、大谷選手の関与が大きく変わる。「ESPNによると」と書くしかなかった。

ESPNはその後も、水原容疑者の説明に基づく詳細な続報を続けた。情報が錯綜している時こそ、当事者に確認した内容を伝えるのがメディアの役割だが、当の水原容疑者は居場所すら分からない。一方、日本でも関心事であるのは間違いない。これも「ESPNによると」と伝えることしかなかった。

「大谷選手が賭博を知っていた」とあるいは、「自ら関わっていた」という臆測も続くなか、大谷選手が初めて自ら説明したのは、米国に戻つ

た後の25日。スポーツ賭博や、胴元への送金について全面否定した。

だが、銀行口座の管理方法などは説明せず、質問もできなかった。やはり疑問が残ったまま、当事者の言い分を一方的に伝えることになった。

「奇異な事件」に残る疑問

ようやく、送金の経緯などが見えてきたのは4月11日に連邦検察が水原容疑者を訴追し、関連文書を公表した時だった。水原容疑者が自ら大谷選手の口座にアクセスし、1600万ドルもの大金を胴元に送金していたことや、胴元との詳細なやり取りも明らかになった。検察側はまた、「大谷選手は被害者」と断言した。

発表を聞き、事実を確認して報じることの大切さを改めて感じた。しかし、検察側の資料を読んでも、分からない点がまだある。水原容疑者側の言い分も、まだ直接確認できていない。裁判所へ出廷した際には罪状認否をせず、弁護人も取材に応じなかった。

奇異な事件はいかにして起きたか。まだ、取材は終わりそうにない。

なかい・だいすけ ▼1994年入社
会部などを経て、2021年から2回目の
のニューヨーク支局勤務

小林製薬「紅麴サプリ」健康被害

中野 颯大
(読売テレビ放送経済
運輸担当キャップ)

未知の成分との格闘 風評懸念 報道も検証必要

「想定していない未知の成分が
検出された」

小林製薬の「紅麴」の成分を含む
サプリメントを摂取していた5人が
亡くなり、200人以上が入院をし
た健康被害の問題。全国で約86万個
が販売され、紅麴原料を仕入れてい
た企業は173社にのぼる。健康にな
ろうと願って摂取したサプリで被害
が生じた問題はまさに社会問題とし
て世間の注目を集めている。一方、取
材や放送をめぐっては葛藤もあった。
会社は3月22日に一連の問題を初
めて公表した会見の中で、サプリの
中に「想定していなかった成分」未
知の成分が含まれていたと強調
した。原因に注目が集まる中、この
キャッチーな言葉が出たことで、報
道が一気に過熱した。そして、会社
は翌週29日の会見の中で、厚労省な
どの発表に引張られる形で、その
可能性が高いもの一つとして、「プ
ベルル酸」の存在を明らかにした。
私たちはこれを受けて、「プベルル

酸」について取材を進めた。しかし、
国内のみならず、海外を含めても研
究論文は数えるほどしか存在しな
い。青カビから発生する天然化合物
とはいうものの、国内に詳しい研究
者はほとんどおらず、物質が人体に
与える影響についてはまさに未知
知。現在は国が主導し、分析が進
められている。

サプリを独自に分析依頼

「そもそもほとんど知っている人
がいない物質が、サプリの中に本当
に存在するのか」。取材者として、
率直に疑問に思った。そのため、私
たちは会社が公表している製造番号
のサプリを入手し、大学の研究機関
に独自に分析を依頼した。結果、問
題の紅麴コレステヘルプの錠剤の中
に、「プベルル酸」と同じ性質をも
つ化合物が存在していることを確認
することができた。珍しい物質であ
ったために、プベルル酸であると断
定することまではできなかったもの

の、何が入っているかわからないも
のの中から原因物質を探すことが非
常に難しいことであることも取材で
痛感した。一定の科学的根拠を示せ
たことは、放送する際の自信につな
がったことは間違いない。その一方、
「プベルル酸」と腎疾患との関係性
は明らかにすることができなかった。
因果関係を示すことができない
中、あたかも「プベルル酸」のみが
原因のような報道になつていなかっ
たか。改めて当時の報道に問題がな
かったか、今後検証する機会を設け
たい。

別の「麴」の注文も減少

問題の公表後、各社が大きく報道



記者会見を開いた小林製薬の小林章浩社長（左から2人目）ら＝（3月29日/大阪市内/読売テレビ放送提供）

したことで小林製薬の株価は下落し
たほか、「紅麴」は危険という認識
が広がり、いわゆる風評被害も広が
った。今回はじめて知ったのだが、
実は紅麴を製造している会社は国内
に数えるほどしか存在しない。取材
に応じたくれた人の中には、紅麴の
製造の難しさを口にしながらも、「途
中の工程できちんとチェックすれ
ば、気づけたはずだ」と語気を強め、
「問題の発覚以降、別の麴なども注
文が減っている」と嘆いていたのが
印象的だった。一企業だけではなく、
業界全体にも暗い影を落としていた
のだ。我々も報道する際、見出しな
どに「紅麴問題」などと表記してい
るが、「紅麴」が悪かったのか、小
林製薬の単なる製造工程の不備なの
かなど、現時点で詳細な原因はわか
っていない。国や大阪市、会社など
には速やかな検証と結果の公表を求
めるとともに、原因がわからない中
で報道を続ける私たちの発信する内
容は適切だったのか、もたらした影
響の責任についても問われる日が来
るのかもしれない。

なかの・そうだい▼2018年入社 和
歌山担当 神戸支局などを経て 23年
6月より経済・運輸担当 24年1月から
現職

尊富士、110年ぶり新入幕優勝 前川 晋作(スポーツニッポン 新聞社スポーツ部)

「本能のままに」気迫の白星 歴史変えた「あの時の高校生」

記録にも記憶にも残る、歴史的偉業に立ち会えた。大相撲春場所です。10年ぶりとなる新入幕優勝を成し遂げた尊富士。初土俵から10場所目は史上最速、大銀杏が結えないちょんまげ力士としては史上初という記録づくめだが、それ以上にドラマチックな展開が見る者の心に深く刻まれた。

「死んでもいいから前に」

右足関節じん帯損傷のケガを負い休場は免れないと思われた千秋楽、気力で強行出場。「死んでもいいから前に出ようと思った。やるしかないで」。自らの手で優勝をつかみ取った尊富士の、とてつもない精神力の強さを感じた。「記録よりも記憶に残る力士になりたい」。昭和の大横綱・大鵬に並ぶ新入幕初日から11連勝を達成した直後のインタビューで発した言葉は、すぐに現実のものとなった。

14日目の夜、救急搬送された尊富



豪ノ山(右)を破って史上最速優勝を決めた尊富士(3月24日/エディオンアリーナ大阪/スポーツニッポン新聞社提供)

士を追いかけるように私も会場のエディオンアリーナ大阪から大阪市内の病院へと向かった。最悪の事態が起きてしまったという絶望感、少しでも軽症であってほしいと願うかすかな希望、徹夜で準備した優勝用の原稿が無駄になってしまふのかという不安：いろいろな感情が交じったまま、凍えるような寒空の下で大勢の報道陣とともに待ち続けた。無事を祈りながら、7年前と5年

前に見た映像が脳裏によりみがえつた。尊富士が鳥取城北高3年だった2017年の国体個人戦準決勝で左膝を負傷した場面と、日大2年だった19年の全国学生選手権団体戦決勝で右膝を負傷した場面だ。ともに、全国制覇という大願成就の目前に見舞われたアクシデント。今回の状況と重なった。休場か、強行出場か。千秋楽の午後2時過ぎに、自力で歩いて場所入りする姿を見届けるまでは分からない状態だった。

私は早大相撲部に所属していた大学時代、出稽古に訪れた当時高校生の尊富士と一緒に稽古をしたことがある。当時から立ち合いのスピードや馬力は抜群で、5歳年上の私よりも明らかに強かったことを覚えている。優勝する姿も見たいけど、無理だけはしないでほしい：昔からよく知っているからこそ、歴史的偉業への期待よりもケガへの心配の方が大きかった。そんな周囲の不安をよそに、ケガを感じさせない相撲内容で見事に優勝。劇的すぎる結末に感動すると同時に、あの時の高校生が大相撲の歴史を変えたのかと、不思議な気持ちになった。

「常に自信は持っている」

これまで尊富士を取材していく中

で、数々の名言に驚かされてきた。初めて幕内の土俵に挑戦する心境を問うと「常に自信は持っている」「調子悪い日はない」と強気な発言。体のケアの話になると「ライオンとか治療しないじゃないですか。ありのままですよ」「サブリを摂っているのは人間ぐらい」といった人間離れした思考も披露していた。よく口にしていたのは「本能のままに生きていく」という言葉。常人では考えられない強行出場、そして気迫の白星はまさに「本能のままに」つかみ取ったものだった。

仮に尊富士が優勝を逃していたとしても、歴史的偉業が成し遂げられたことには変わりない。最後まで優勝を争った大の里もまた史上最速記録の更新、そして史上初のさんばら優勝が懸かっていた。つい最近までアマチュアの大会で見えてきた2人が、大相撲の最高峰の舞台で優勝争い。学生相撲出身力士士の活躍は学生相撲出身記者として感慨深くもあった。相撲史に、そして多くの人々に刻まれたこの場所の記憶は、今後何十年、何百年と語り継がれていくだろう。

まえがわ・しんさく▼2017年入社
編集局整理部を経て 22年からスポーツ部で相撲などを担当

新・列島報告⑧ 静岡県
リニア中央新幹線開業延期

「大きな区切り」知事辞職 失言すり替えと批判も

坪内 明美
(SBS静岡放送県政キャップ)

「残念ながら、2027年の開業は実現しない」とJR東海の丹羽俊介社長が明言したのは今年3月29日。国交省で開かれた「モニタリング会議」で、リニア中央新幹線の品川～名古屋間の開業時期について、当初目標にしていた27年を断念する方針を正式に表明した。

JR東海が示した事業計画では、静岡工区は着手から開業まで約10年を見込んでいて、仮に今年4月に着手できたとしても、開業は34年以降になる見通しだ。丹羽社長は、静岡工区は17年11月の工事契約締結からすでに6年以上経過し、名古屋まで

の開業の遅れに直結していると指摘した。

「一滴も譲らない」で膠着

静岡工区をめぐる膠着状態は、南アルプスのトンネル工事によって県内を流れる大井川の水量減少や生態系への影響などを懸念して、川勝平太知事が着工を認めず、県とJR東海の議論は膠着状態に陥った。県が当初からこだわっていたのは大井川の水の「全量戻し」だ。川勝知事は「命の水」と称し、一滴も譲らない姿勢を貫いてきた。

19年6月の記者会見で川勝知事はJR東海に対して「会社が立てた事業計画を金科玉条のごとく相手に押し付けるのは無礼千万」と強く言い放った。歯に衣着せぬ物言いをする



突如、辞意を表明した川勝平太知事(4月2日/静岡県庁/静岡放送提供)

「川勝節」は全国的にも注目された。20年6月には当時のJR東海の子丹羽社長が川勝知事に工事着工を直談判するも、進展しなかった。見かねた国は仲裁に入る形で有識者会議を設置し、昨年12月に対応策をまとめた。しかし、川勝知事は生物多様性や発生土置き場など30項目について「課題が残る」という姿勢を崩さなかった。

解決の糸口が見えないまま、JR東海は「2027年開業断念」に追い込まれたのだ。県とJR東海の押し問答を長年みてきた大井川流域の市長は「何も驚くことはない。現状をふまえて、現実的な判断。建設的な議論を求めると冷静だった。」

リニア開業延期が決まり、川勝知事は成果を得たかに思えた。しかし、その4日後、事態は急展開を迎える。

「川勝節」発信力があだに

「今年6月議会をもって職を辞そうと思う」と川勝知事が突如、報道陣の囲み取材で辞意を表明したのだ。騒然とする記者たちを振り切り、知事は足早に去った。囲み取材は、もともと知事が新入職員への訓示で職業差別ともとれる発言をしたことを受けて設定された。不適切発言による辞意表明との認識だったが、翌日の会見で辞職の理由として挙げた

のが「リニアの開業延期」だった。知事は「事業計画を書き直したものがでた。リニア問題は大きな区切りを迎えた」と言い切った。命の水を守り抜いたという成果を強調したのだ。記者からは「失言が理由で辞めるのに、リニア問題にすり替えている」との指摘が相次いだ。知事は真意を語らないまま4月10日に退職届を提出。自治体や国をも巻き込みリニア問題と対峙してきた4期15年の川勝県政の幕引きだ。

地元記者として幾度となく川勝節には振り回されたが、県民からは共感を呼び、支持されていたのも事実だ。最終的にはその発信力があだになった。「言葉は薬にもなれば、凶器にもなる」という名言を体現したような知事だった。

静岡工区の議論は次の知事に委ねられることになり、焦点は5月26日投票の県知事選挙へと移った。すでに立候補を表明した人の中では「推進」と「反対」で主張が分かれている。選挙戦では、リニアに対する立場や工事着手の具体的な方向性などが大きな争点になるだろう。東京と名古屋をわずか40分で結ぶ「夢の超特急」の行く末は誰に託されるのか。

つぼうち・あけみ▼2017年入社
19年から静岡放送報道部県政担当

(4月25日記)

私が会ったあの人

ジュサーラさん ハイチ難民の少女 夢追い「死のジャングル」へ

市川 正峻 (TBSテレビ)

ハイチ難民の取材に、南米コロンビアを訪れたのは2021年のことだった。ネコクリという小さな港町の海岸沿いには、難民が暮らすテントが、数えきれないほど乱立していた。なぜコロンビアに？ 彼らは、隣国パナマを目指すため、待ち受ける「死のジャングル」を乗り越える準備をしている。多くの難民がいら立ち、ピリピリした空気が張り詰める中、ジュサーラさん家族は私たちの取材を受けてくれた。彼らが暮らすのはぼろぼろの民家。1人あたりの家賃は1日6ドル。家族には大きな負担だった。狭い部屋に8人で寝泊まりする生活。庭でくんだ水を飲んで体調を崩した。一日も早く出発したいという思いがある一方、ジュサーラさんの父・ニクソンさんは家族で「死のジャングル」を乗り越えられるか、不安を隠せないでいた。それでも進むしかない。政情不安に揺れる祖国に

は、もう、戻ることはできない。

取材機材を持って現れた私たちに、長女・ジュサーラさん(当時13)は当初、げんな顔をしていたのを覚えている。私たちが家の中を撮影し、ニクソンさんのインタビューをしている間、ジュサーラさんはカメラに映りこむのを避けるようにしていた。一緒に取材にあたっていた通訳担当のスタッフが彼女を散歩に誘うと、ジュサーラさんは率直な心境を明かしてくれた。

■まだ13歳 大きな覚悟

「不安な気持ちでいっぱいです」ジュサーラさんは、これから待ち受ける旅路に恐怖を感じていた。「死のジャングル」を渡ろうとして、21年には200人以上が命を落としました。弱冠13歳で、大きな覚悟をしなければならなかった。ジュサーラさんは、そうした恐怖の気持ちを明かすとともに、前向きな思いも教えてくれた。



笑顔も見せてくれたジュサーラさん (2021年10月/南米コロンビア/筆者撮影/TBSテレビ提供)

「私の最初の夢は、ハイチに残っている家族を助けること。私たちがより良い生活を築き、ハイチの家族もより良い生活を築いてほしいの」なぜアメリカを目指すのか。彼女はその理由をきちんと理解していた。実は、この家族はハイチを逃れたあと、一時期ブラジルに住んでいた。しかし新型コロナウイルスの影響もあり、父・ニクソンさんは職を失う。安定的な生活はできなくなった。移民に厳しい政策をとってきたトランプ前大統領からバイデン政権に変わり、移民政策も寛容になると期待した多くの難民と同様に、この家族もアメリカに行くことを決意する。ジュサーラさんはこれまでの道のりを振り返り、こう言った。「ずっとうまくいくように神に祈り続けてきた。だからこの先に向かって行くの」

■「家族一緒に」が叶えば

私たちは彼女に「夢は何？」と尋ねた。すると彼女は笑顔を見せ、こう話してくれた。

「家族がいつもそばにいて、当たり前のようにクリスマスはみんな家族でパーティーをしてお祝いをするの」

ジュサーラさんの話には、いつも「家族」というキーワードが出てくる。ジャングルで命を落とすかもしれない境遇にある彼女だが、明るく笑いながらこう続けた。

「父は、人生は家族一緒にっていつも言っている。それが私が叶えたい夢。それが叶った後は、人生がきつと何とかしてくれる」

コロンビアの海を眺めながら彼女が明かしてくれた夢は爽やかだった。そして私たちが取材した数日後、この家族も、難民の暮らす街を出発した。

(いちかわ・まさとし 2010年入社 報道カメラマンを経て 社会部 警視庁などを担当 ニューヨーク特派員を経て 23年から報道局デスク編集者)

■次号は岩橋裕介さん(共同通信社)にバトンが渡ります。

訪朝66回の母の思い紡ぐ 「寺越事件」の真相求めて



なかにし しげる
中西 茂

1958年生まれ 83年読売新聞社入社 金沢支局 東京本社 社会部 解説部次長 編集委員などを経て 2016年退社 玉川大学教授を8年務め 現在は星槎大学客員教授 教育ジャーナリスト 著書に『教育改革を問う キーパーソン7人と考える「最新論争点」』（教育開発研究所）など

訪朝66回、92歳、寺越友枝さん死去—そんな記事が2024年2月末

の新聞に載った。最初に北朝鮮を訪ねた時は56歳。息子の武志さんらとの24年ぶりの再会を報じた筆者は、この問題にこだわり続け、母親の思いを、新聞のコラムなどで、ことあるごとに書いてきた。この「事件」を忘れないでほしいと願っている。

友枝さんが亡くなったいま、その思いを、多くの人の目に触れる原稿で伝えるのは、これが最後になるかもしれない。だが、そうした家族の思いは、拉致被害者の家族の思いと同じように、後世に語り継がれていかなければいけないのだと思う。

1963年に漁に出て遭難したはずだった息子や弟が、24年もたってから北朝鮮で生きていたことがわかった—まるで浦島太郎のような話に家族や親族の驚きはいかほどだった

ただろうか。

遭難当時の読売新聞石川県版の記事には、丸刈りの13歳だった武志さんの顔写真も載り、「夫をわが子を海岸で血眼 船体はさげ大穴」といった見出しがついている。

武志さんらの生存を伝える手紙が突然、石川県志賀町の親族のもとに届いたのは1987年1月のことだった。3月になって手紙のことが報じられると、地元メディアが金沢市内の友枝さんの自宅に殺到した。

金沢支局に勤務し、記者4年目を終えようとしていた筆者もその一人だった。戸惑いを隠せない家族らから、玄関先で話を聞いたことを覚えている。

北陸中日新聞の特ダネを追いかけ形だったが、系列の東京新聞には掲載されなかったことで、読売新聞も大きな扱いにしてくれたのは、そ

の先の展開を考えても幸運なことだったと言える。

◆母子再会 取材は北京から

この騒動から5カ月余り。友枝さんは四方八方に手を尽くし、ようやく北朝鮮訪問が実現した。夫の太左エ門さん、社会党朝鮮問題対策特別委員会事務局長としてパイプ役を務めた、地元選出の嶋崎讓衆議院議員と一緒にだった。

24年ぶりの再会を伝えた時、筆者は中国の北京にいた。北朝鮮がメディアの入国を認めなかったため、電話で取材するしかなかったのだ。

当時、日本から北朝鮮に電話を申し込んでも、つながるのは何時間先かわからない状態だった。中国からなら申し込んで何分かつただけで良かった。

もっとも、かの国は「会わせる」

と言っても、それがいつになるのかは事前に教えてくれない。携帯電話も電子メールもない時代だ。嶋崎氏や夫婦が平壤のホテルに戻る時間を見計らって毎晩、電話をかけるしかなかった。

◆箱乗りの飛行機で見た涙

劇的な対面は、友枝さん夫婦が北朝鮮に入国して4日目の9月3日。友枝さんのはずんだ声を聞くことができた。

会った瞬間に我が子だと本能的にわかったようだったが、本人でなければわからない実家の近くの様子を聞いて確かめた。

「思ったより立派に育っていた」「手のひらをみて苦労しとる手でないことがわかった」「荷物も持ってもらえて『お母さん、お姫様みたい』と話した」

当時の電話取材のメモを読み返してみても、母の思いがあふれていることがわかる。

対面後、帰国前に立ち寄った北京での記者会見は、笑顔も見せながら気丈にふるまっていた友枝さんだったが、北京から成田に向かう飛行機の中では違った。到着まで機内ですつと号泣し続けたのだ。

箱乗り取材ができたのは筆者だけだったが、全くコメントがとれないうままに入国となった。ダメ記者と云うほかなかった。

◆「武志にも切符がほしい」

筆者はその後寺越家を定期的に訪ねた。そのうちに居間にあがって、時には食事までご馳走になる関係を築くことができた。雑誌記者の取材に、親族のような顔をして同席したこともある。

あるときは、武志さんからの電話の録音も聞かせてもらった。そこでも友枝さんは常に、武志さんの健康を気遣う母親の顔を見せていた。

友枝さんは次の訪朝のためにも必要だからと働き続けた。筆者は、武志さんのもとに物資を送る友枝さんのことを社会面のコラムにもした。日本人妻の帰国が実現することになった1997年には、「武志にも切符

がほしい」と訴える原稿を社会面の記事に添えた。

中学生で図らずも異国での生活を余儀なくされた教養な運命の武志さんのことは、教育専門記者として中学生向けに依頼された講演で話したり、道徳の教育雑誌で紹介したりもしてきた。

武志さんの一時帰国は2002年に、ただの一度だけ実現した。しかし、訪日団の副団長としての帰国だった。この直後、拉致被害者5人が帰国した。

一時帰国の時、筆者は手術を受けて入院中だったため、武志さんの日



39年ぶりに北朝鮮から一時帰国した息子の武志さん(左)と手を取り合う寺越友枝さん(2002年10月3日/成田空港/読売新聞社提供)

本での取材に関わることが全くできなかった。ここでも間の悪い記者であることをさらけ出した。

その後、北朝鮮に渡ったまま暮らすことになった夫が2008年に他界。最後の訪朝はその10年後で87歳だった。友枝さん自身も、北朝鮮と一緒に暮らすことを誘われていた。

母子の間で真相がどこまで話されたかはわからない。友枝さんからは、2人のやりとりを聞く機会もあった。しかし、聞いたのは、友枝さんが真相を確かめようとしても武志さんが言葉を濁したといったところまで。記事化には至らなかった。

いまでも悔いが残るのは、初回の訪朝直後の石川県版の連載で、真相というタイトルを、鍵かっこなしで載せたことだ。遭難したメバル漁の船はわずか1・5ト。「機関故障した近海で深夜に100トほどの船に衝突されて海に投げ出され、気づいたときには北朝鮮にいた」というストーリーを、「真相」ではなく真相として書かざるを得なかった。

拉致被害者家族会に加わるかどうかでも、友枝さんの心は揺れ動いた。自分の意志とは関係なく北朝鮮に渡って住み続け、孫までいる武志さんの立場を考えて常に行動していたのだと思う。

友枝さんの入院を知った昨年、武志さんは、心配して何度も電話をかけ、妹の正枝さんに「海の深さと山の高さは測れるけど、母の愛は計り知れない」と話したという。長く離れて暮らした母子の絆は強かった。

◆密かに「金沢のお母さん」と

今回の原稿を書くために、正枝さんと連絡をとった。「どうぞ、どうぞ、なんでも書いてください。『中西さんは一番書けることを聞いた記者者やったがに(聞いていた記者だったのに)』と、母はよう言うてました(よく言っていました)」と懐かしい金沢弁が聞こえてきた。

筆者と九つ違いの武志さんはいま74歳。そして友枝さんは筆者の母と同一年だった。私的なことを加えれば、筆者の母は海で長男(筆者の兄)をなくしている。そんな縁で(金沢のお母さん)と密かに思っていた。

一時帰国実現の前には、「なんとならながか(ならないか)」と友枝さんから何度となく言われた。この点でも全く力になれなかった。

「お母さん、最後までダメな新聞記者でした」といつか墓前で謝るしかない。しかし、真相が解明されるときまで、筆者を含む関係者が語り続けることは必要だと思っている。

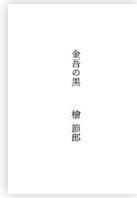
マイBOOK  マイPR

■『金吾の黒』

秋山 哲(毎日新聞出身)

女性の自殺、二人の男性の苦悩

筆名「檜節郎」としての私の3冊目の小説。これまでと同様にオンデマンド方式で出版し、アマゾンと楽天ブックスで販売している。戦後間もなくの京都が舞台。中国帰りの女性が茶室で自殺する。深い関係にあった茶道家元の後継者と、女性の幼い養子の二人が女性の死を理解しようと苦しむ。33年たって二人が暗闇の茶室で対峙し、苦しみの結論を導き出そうと対話する。小早川秀秋が残したという茶碗が影の主役となる。



パプファンセルフ 2,200円

は大谷翔平の出現によって「大リーグに追いつき追い越せ」との宿題を果たした。その間、およそ100年。名勝負、記録の裏面で事件にも遭遇しながらしぶとくしのいできた。1960年代半ばからの取材と古今の球界関係者、愛好家などの話を後世に伝えるべくまとめた。エピソードは100を数え図書館の蔵書となる歴史書でもある。



大修館書店 14,300円

2023年12月出版、B5版、400超ページ、写真200余枚。2023年度ミズノスポーツライター賞優秀賞。

■『ニッポンはじめて物語 世界初・日本初のヒット商品を生んだ開発者の熱き魂』

北辻 利寿(CBCテレビ論説室・特別解説委員)

日本生まれ 開発秘話を追う

ビニール傘、カッターナイフ、乾電池、食品サンプル、そして自動改札機。暮らしの中に当たり前のように存在しているもの、実は多くは日本生まれです。そんな「開発秘話」を追いました。ラジオ番組で紹介したテーマをコラムとして執筆、120ものテーマの中から、厳選した70のエピソードを1冊にまとめました。ニッポンの開発魂と商品にかける細やかさ。歴史を刻んだ数々の「はじめて物語」は、現在の私たちへの熱きエールにあふれています。



東京ニュース通信社 1,650円

■『僕らはまだテレビをあきらめない』

「早大そうだったのか！ジャーナリズム研究会」など共著

政治によるメディア介入に警鐘

放送・新聞・通信にまたがるベテランジャーナリストや大学教員6人が、早稲田大学の研究プロジェクトとして、政権への付度や萎縮に流されがちな近年のテレビ報道について、放送倫理・番組向上機構(BPO)の「放送倫理検証委員会」委員だった映画監督の是枝裕和氏、元委員長で弁護士の川端和治氏らにインタビューした。その詳細や6人による座談会などを収録した。テレビ・ドキュメンタリー制作経験も豊富な是枝氏による「放送と公権力の関係について」の論考は示唆に富み、メディア関係者必読。



緑風出版 2,750円

高橋 弘司(毎日新聞出身)筆

■『宇宙の地政学』

倉澤 治雄(日本テレビ出身)

宇宙開発最前線、日本は勝ち残れるか？

科学技術の世界では人類史上、例を見ないパラダイムシフトが起きています。とくに宇宙開発分野では「米ソから米中へ」「国威発揚からビジネスへ」「国策から民間へ」「平和利用から軍民融合へ」と大きな地政学的変化に見舞われています。21世紀初となる有人月探査レースを中心に、世界の宇宙開発の現状をフラットな視点で紹介します。また日本が宇宙イノベーションの時代を勝ち抜き、「科学技術立国」として復活するための方策を読者とともに考えます。



筑摩書房 1,012円

■『ソーシャル・シンキング 自分で考え、発言する力を養う』

長谷川 智(朝日新聞出身)

ビジネスパーソンの教養を問う

「日本企業のイノベーション不足は、ビジネスパーソンの視野の狭さが一因」。そんな問題意識で書いた。目次の項目は「山田洋次監督を生んだ実践知」「日本の凋落」「イノベーターシップの確立」「企業倫理の再構築」「自然と人間」「東洋と西洋」「東京と地方」「キャリア形成」「コミュニケーション」「ジェンダー平等」「メディア活用」と幅広い。長い経済記者経験、定年退職後に在籍したライフシフト大学で得た知見をまとめた。反論は大歓迎。



PHPエディターズグループ 1,760円

■『日本プロ野球の歴史 激動の時代を乗り越えて』

菅谷 齊(共同通信出身)

激動を生き抜いた真実

ベーブ・ルース来日を機に発足したプロ野球

この欄へ掲載ご希望の方は下記の担当までお問い合わせください。

事務局：西村志織 電話：03-3503-2729

メール：nishimura@jnpc.or.jp

死刑が執行された元死刑囚の再審請求の行方を追ったNHKBBSのドキュメンタリー番組を再構成した映画が完成した。2時間38分の長編だ。事件は32年前、福岡県飯塚市で起きた。登校途中の小学1年生の女兒2人が行方不明になり、絞殺された遺体になって山中で発見。同じ校区に住む無職の男性が逮捕されるが容疑を否認。裁判でも無罪を主張した

「正義の行方」

試写室
(4.5)



が、死刑が確定し、確定の2年後に執行された。

検察側は決定的な物証をそろえることができなかった。裁判所は、技術水準が未熟な段階のDNA鑑定、遺棄現場の目撃証言、車の繊維や血痕の血液型鑑定といった単体では弱い証拠を総合して有罪と認定した。再審請求審では、最大の柱とされたDNA鑑定の信用性が崩されていく。

「真実」に代わり追ったもの

映画は、捜査の正当性を主張する福岡県警の元幹部、再審開始に執念を燃やす弁護士、当時の報道の検証をする地元の新聞記者——。三者の思いや行動を描く。

真実は何か。検証取材をした記者は「神様でもない限り分からない」と語る。代わりに、木寺一孝監督が追ったのは三者それぞれが信じる「正義」だ。木寺さんは「正義のぶつかり合い」に迫ることで、ギリギリの所で作品を成り立たせた。

冤罪を信じる人、逆に警察を信じる人、いずれもが映画に不満を抱くかも知れない。「立場を明らかにせず、逃がっている」と言う人がいるかもしれない。だが真実が分からない以上、木寺さんの態度は誠実だと思う。

報道の在り方も問われている。捜査段階の警察担当記者は「(自分は)ペンを持ったおまわりさんでした」と自戒を込めて言う。だが、情報が捜査当局に集まり、記者が当局に依存する警察取材の構造は今も大きく変わっていない。情報公開制度も不十分で、事後検証もきちんとできない。今後、どのような事件報道を目指していくべきなのだろうか。

毎日新聞社新聞研究本部 青島 顕
東京・ユーロスペースほか全国順次公開中
テレビ版制作・NHK制作・ビジュアルオフィス・
善 配給・東風 ©NHK



「メディアアリテラシー」を冠した本の中で、マスコミが肯定的に語られている。カナダ在住のフリージャーナリスト

が子ども向けに書いた『それって本当? メディアアリテラシーはじめよう』(ジョイス・グラント著、キャスリーン・マルコット絵、片柳伊佐訳、岩崎書店、2023年12月)という絵本を、軽い驚きをもって読んだ。

自分がこの言葉を知ったのは、1990年代初めにFCT(市民のテレビの会)の主張に接したときだ。FCTは、テレビが子どもの成長に悪影響を与えることを危惧して、77年に発足した市民団体。カナダ・オンタリオ州教育省が教育者向けに作ったガイドブック『メディア・リテラシー』(マスメディアを読み解く)、リベルタ出版、92年11月)を翻訳して紹介するなど、メディアアリテラシーという概念の日本への導入に大きな役割を果たした。

喜ぶべきか、悲しむべきか

みにせず、批判的・主体的に読み解く力とされた。放送業界に属する人間にとつて、やや耳障りな言葉だった。民放連がFCTなどの視聴者団体を招いて民放関係者と懇談する機会を設けた時も、ぎこちない雰囲気であったことを覚えている。

ところが、『それって本当?』では、インターネットやSNSで流布するフェイクニュースを見分けるために、テレビや新聞といったマスコミを参照することが推奨される。本当のジャーナリズムは手間暇をかけて作られていることや、間違えた時にはきちんと訂正していることを紹介する章も設けられている。殺伐とした情報空間がオンライン上に広がる時代にあつて、メディアアリテラシーにかかわる人によつて、マスコミが伝える情報の価値が認められたと喜んでよいのか。それとも、影響力が低下して主たる批判の対象でなくなったと悲しむべきなのか。この本の読後感は少し複雑だ。

日本民間放送連盟事務局長
本橋 春紀

<法人代表変更>

- ・愛媛新聞社 加藤令史 代表取締役社長 社長執行役員 (旧 土居英雄氏)
- ・WOWOW 山本均 社長執行役員 (旧 田中晃氏)
- ・朝日放送テレビ 岩田潤 取締役 (旧 今村俊昭氏)
- ・日経映像 篠原洋一 代表取締役社長 (旧 源関隆氏)

■会議報告

●第452回会報委員会 (4.1 大会議室)

5月号の編集について協議した。

出席 榊原委員長、志賀、水野、佐藤、萩原、勝田、本橋、稲澤、倉重、二村の各委員。

●2024年度日本記者クラブ賞・同特別賞選考委員会 (4.10 会見場)

今井環クラブ賞推薦委員長からの報告の後、選考に入り、クラブ賞に後藤謙次氏(共同通信社客員論説委員、白鷗大学名誉教授)、同特別賞に北海道放送ヤジ排除取材班とテレビ静岡の「イーちゃんの白い杖」取材班を受賞者として理事会に答申することを決定した。

出席 角田委員長、藤井、榊原、瀬口、米田、伊佐治、内藤、小林、林、堀木の各委員、前田理事長、沢井、中嶋の両副理事長、江木専務理事。

●第549回企画委員会

(4.12 10階ホール&オンライン)

新任の行方史郎・朝日新聞社論説委員(旧 黒沢大陸氏)、西山公隆・同社ゼネラルエディター補佐(旧 秋山訓子氏)、永山悦子・毎日新聞社論説副委員長(旧 元村有希子氏)、沢田啓太郎・日刊スポーツ新聞社特別編集委員(旧 岡山俊明氏)、森奈津子・北海道新聞社東京支社編集局長兼論説委員(旧 澤田信孝氏)、石原淳子・テレビ東京取材センター長兼経済部長(旧 野田雄輔氏)の6委員があいさつした。

総会記念講演会の講師に防衛大学校長の久保文明さんが決定したことを報告し、今後のゲスト候補について意見交換した。

出席 藤井委員長、行方、井田、西山、佐藤、永山、橋本、大内、辻本、高橋、森田、杉田、川上、小林、中村、森、早川、山口(哲)、沢田、伊藤、今井、出川、播摩、小栗、名村、石原、江川、倉澤の各委員。

●第560回会員資格委員会 (4.17 小会議室)

新任の山本明彦・毎日新聞社論説副委員長(旧 竹川正記氏)、高橋祐司・日本経済新聞社編集 特命担当(旧 宮東治彦氏)の両委員があいさつした後、5月1日付入退会を審議、理事会に答申した。

出席 前木委員長、早田、山本、村尾、高橋、居石、菊池、森安の各委員。

●第51回監事会 (4.18 小会議室)

2023年度の事業報告・同決算案の監査を行った。

出席 名取、山口の両監事。



新しい個人D会員

社をご卒業の機にクラブへの入会をご希望のかたは事務局へお問い合わせください。

■■■ 伊藤 嘉英 1980年中日新聞入社。モスクワ支局、放送芸能部次長、電子メディア局長など。出向先の石川テレビ放送では常務取締役総合企画室長などを歴任し2023年退任。



新聞社からローカルテレビ局に移り、6年間を金沢で過ごしました。区切りをつけて東京に戻ったのを機に、入会いたしました。よろしくお願ひします。

■■■ 島田 敏男 1981年日本放送協会入局。政治部では野党キャップ、官邸キャップ、デスク。解説副委員長、「日曜討論」司会、名古屋放送局長、放送文化研究所研究主幹を経て2024年3月退局。



テレビ・ラジオで発信するとき、常に頭にあったのは政治を支える有権者の存在です。永田町と全国各地を往来し、双方向でつなぎたいです!

■■■ 田中 信輔 1982年東京放送(TBS)入社。バンコク、ニューヨークの各特派員、ロサンゼルス支局長、スポーツ局担当部長、国際契約担当部長などを経て2018年退社。



世界が激動する歴史の転換点で、まずは行動とクラブへ入会しました。何をしたらよいか、自分に何ができるのか、現在思案中です。

■■■ 広瀬 賢 1982年日本経済新聞入社。経済部記者、産業部次長、ウイークエンド編集部次長、水戸支局長、社長室部長、監査役室長などを経て2016年退社。関連2社で監査役。



編集を離れて18年。電子版の立ち上げや経営の監査に携わってきました。退職を機に一記者に戻ってニュースの最前線に触れることが楽しみです。

●第140回総務委員会 (4.24 10階ホール)

2023年度の事業報告・同決算の原案を作成、理事会に上程することにした。

出席 角田委員長、前木、藤井、榊原、瀬口、伊佐治、内藤、林、堀木の各委員、前田理事長、沢井副理事長、江木専務理事。

●第711回理事会 (4.24 10階ホール)

①2023年度の事業報告・同決算を総務委員会案通り承認し、定時社員総会(5月31日)に上程することを決定した。

②2024年度日本記者クラブ賞・同特別賞を選考委員会の選考結果通りに決定した。

出席 前田理事長、沢井副理事長、江木専務理事、角田、前木、藤井、榊原、藤野、鎌田、瀬口、今井、齋田、吉原、曾山、伊佐治、内藤、林、堀木の各理事、中元、山口の両監事。

レストラン*価格は全て税込みです

予約電話 和食 3503-2723 洋食 3503-2766・2731

和食 五月献立(5/31まで)

先付前菜：鯛ちまき寿司、矢羽根蓮根、的射穴子、猩々蛸など 猪口：ウド酢みそ和え 椀盛り：織部豆腐 造り：カツオ、ミョウガ、玉ねぎ、針生姜 揚げ物：海老真丈、二身揚げなど 冷煮物：かぼちゃそぼろ煮、スナッペンドウ 酢の物：白ずいき、梅肉とろろ掛け 食事：稲庭うどん 水菓子：キャラメルケーキ、抹茶アイス(5,500円) (板長：薫田勝)
※仕入れの都合により内容が変わることがあります

洋食 季節のおすすめコース(5/31まで)

帆立貝とラタトゥイユのガトー仕立て バジルのソース、グリーンピースのクリームスープ、牛フィレ肉と新玉ねぎのシャリアピンステーキ 西洋山葵のソース、二色グレープフルーツのゼリー、コーヒーまたは紅茶、パンまたはライス(4,400円)。ランチ、ディナーともに9階レストランでもご提供します。(シェフ：佐藤和治)

訃報

屋山太郎会員(時事通信出身、91歳)が4月9日に死去されました。ご冥福をお祈りいたします。

HP情報 <https://www.jnpc.or.jp/>

音声アーカイブ 会見の音声録音

●元横綱・曙さん、元鐘紡会長・伊藤淳二さん

先月、死去が報じられた元横綱の曙太郎さんの会見(左 1993年2月)、元鐘紡会長の伊藤淳二さんの会見(右 日本航空会長として 1986年8月)の音声を公開しました。



曙さんは、外国出身力士として初めて横綱になった際に登壇し相撲の魅力から日米関係や結婚のことまで20以上の質問に答えました。

伊藤さんは「日航の改革と民営化」について語りました。この会見詳録も公開しています。

「音声アーカイブ」には、現在153本の会見音声を開关中です。

今後の行事予定(5/2現在)

16㉞	16:30~18:00 10階ホール 「中国で何が起きているのか」⑬ 川島真 東京大学大学院教授
20㉞	14:30~16:00 10階ホール 「〈政治とカネ〉を問う」⑨ 御厨貴 東京大学名誉教授、同先端科学技術研究センターフェロー
6月3㉞	16:30~17:30 10階ホール チャールズ・オッペンハイマーさん(“原爆の父”オッペンハイマー博士の孫)会見

クラブの電話 ダイヤルイン

- 和食レストラン(9階) …… ☎3503-2723 ●会員事務 …… ☎3503-2727
- 洋食レストラン(10階) …… ☎3503-2766 ●経 理 …… ☎3503-2728
- 貸室予約、宴会打ち合わせ …… ☎3503-2724 ●クラブ行事への申し込み …… ☎3503-2722
- 受 付 …… ☎3503-2721 ●会見申し込みアドレス …… kaiken@jnpc.or.jp

会員現況

- 法人会員：127社 ●基本会員：715人 ●個人会員：1,034人
- 法人・個人賛助会員：54社・117人 ●特別賛助会員：96人
- 名誉・功労会員：12人 ●学生会員：52人 計181社・2,026人

総会記念講演会は久保文明さん

防衛大学校長で米国政治研究の第一人者である久保文明さんをゲストに迎え、下記の通り開催します。「2024年米大統領選挙と日米関係および世界秩序」をテーマに語っていただきます。
日時：5月31日(金) 16:30~17:30
場所：10階ホール

クラブ賞贈賞式・パーティーを開催

講演会に続いて日本記者クラブ賞・同特別賞の贈賞式とパーティーを開催します。クラブ賞受賞の共同通信社客員論説委員、白鷗大学名誉教授の後藤謙次さん、特別賞受賞の北海道放送ヤジ排除取材班ならびにテレビ静岡「イーちゃんの白い杖」取材班に表彰状と副賞を贈り、受賞の言葉もいただきます。

日時：5月31日(金) 17:45~19:00
場所：レストラン・アラスカ

総会記念講演会、贈賞式・パーティーは参加費無料、ビジター1人を同伴していただいて構いません。準備の都合がありますので、出席を希望される方は、クラブのウェブサイトでお申し込みください。

受賞記念講演は7月10日、17日に

受賞者の皆さんが取材上のエピソードや報道への思いを語る記念講演会を2回に分けて開催します。質問にも答えていただく予定です。

- ①7月10日(水) 17:00~18:00
登壇者：後藤謙次さん
- ②7月17日(水) 17:00~19:00
登壇者：山崎裕侍さん 北海道放送コンテンツ制作センター報道部デスク、橋本真理子さん テレビ静岡報道制作局長兼情報ニュース部長、小長谷唯織さん(番組主人公、イーちゃん)

いずれも会場は10階ホールです。Zoomによるオンライン配信も行います。ビジター1人を同伴していただいて構いません。

法人賛助会員 新時代戦略研究所が入会

新時代戦略研究所が法人賛助会員社として入会しました。1997年に株式会社として設立、2018年に一般社団法人となり、社会保障制度に関する調査研究、政策立案を中心に政治・経済・外交分野で政策提言を行っています。

〒100-0014 東京都千代田区永田町2-9-6-205

電話 03-6225-0016

会員登録は下記の方々です。

- ・朝井淳太さん 代表
- ・梅田一郎さん 理事長

会報委員会

- 委員長=榊原 智
- 委員=荒川 康一 稲澤 裕子 勝田 洋人 倉重 篤郎 佐藤 庄太 志賀 英樹 二村 伸 萩原 豊 水野 雅夫 本橋 春紀

(事務局：本庄五月 西村志織)

☎03-3503-2754 FAX 03-3503-7271

撮影：大森 裕太（共同通信札幌支社編集部）



北海道・知床を望む羅臼町沖で、朝日を浴び流水の上を飛ぶ国の天然記念物オオワシ＝3月1日

尾羽が紡いだ文化の道

知床など北海道東部は野鳥の宝庫だ。中でもオオワシは、冬季、訪れるバードウォッチャーにとつて、タンチョウヅルとともに2大スター的な存在——道東地区でネイチャーガイドをしている釧路市の塩博文さんから聞いた話である。

なぜか。羽を広げたときの左右の幅がさつと2・5メートル、どでかい。黄色い嘴を突き出した顔は精悍でイケメン。黒褐色の羽毛に、頭部から羽、尾にかけて白い紋様が入ったスタイルは粋だ。その上、宙を舞う姿が勇壮なものだからなのだろ。

オオワシは極東だけに生息する鳥類で、ロシアの沿海州で繁殖する。11月下旬ごろ、集団で南下し千島列島やサハリンを経由して日本などに渡ってくる。3月中旬ぐらいに一斉に帰還する。過去の乱獲や、繁殖地の開発による環境変化、鉛の散弾で撃たれた動物を食べることによる鉛中毒などの影響で、その総数が約5000羽にまで減少している。日本では、1970年に天然記念物、93年の種の保存法施行に伴い、国内希少野生動植物種にも指定されている。

「歴史をさかのぼると、オオワシの尾羽が異文化の交流を担ってきたことを示す史料も残っている」と『アイヌの歴史海と宝のノマド』（講談社選書メチエ）の著者で、札幌大学教授の瀬川拓郎さんは言う。

『日本書紀』や『吾妻鏡』、中国の『元史』などの記述から、古代のころより沿海州やサハリン、北海道、本州、さらには中国大陸を結ぶオオワシの尾羽の交易の道があったことが考えられる。オオワシの14本の尾羽は、武器の矢羽や、装飾品の肩衣などの材料として、人間に貢献してきたのだ。

永年の恩に報いるためにも、繁殖地のロシアなどとも交流を図り、オオワシの保護に真剣に取り組みたい。

（日本経済新聞出身 足立 則夫）